

連載 オブジェクト指向と哲学

第 70 回 時間と空間(4) - 過去・現在・未来

河合 昭男

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~Kawai>

「電卓 4 兄弟」というタイトルでカシオ計算機創業家の一人樫尾幸雄氏が読売新聞「時代の証言者」に連載されています。リレー式計算機、電卓、デジタル式腕時計、電子楽器、デジカメと次々新しいデジタル製品開発にチャレンジし、初期の企業向けリレー式計算機を除いてはすべて世界中に CASIO ブランドとして浸透してきました。子供の頃の母親の思い出話があります。「明日やる」と言ったら「明日は永遠にこない」と諭されたそうです。明日の朝目が覚めたら今日になっています。つまり「いつやるんですか？今でしょ！」の心でずっとやってこられたのです。

この話、ゼノンの「アキレスは永遠に亀に追いつけない」を連想します。アキレスは亀より後方からスタートします。その時の亀の位置については亀は少し前に進んでいます。この繰り返しで、亀は常に少し先にいます。かくしてアキレスは永久に亀に追いつけない。明日はすぐ近くのように逃げてゆきます。

●過去・現在・未来

我々が生活している今現在というのは過去と未来の間の一点です。その点は慣性の法則のように動いていますが、われわれはその慣性系から抜け出すことはできません。一歩前にも後ろにも自由意志では移動できません。今日は明日になったら昨日となり、明日が今日になります。

過去は記憶に過ぎず、未来は予測や期待することしかできず、そうなるのかならないのかその時まで不明です。感覚として体験できるのは今現在の自分の周辺の空間だけです。

●時間と永遠

この今という瞬間は「本来時間の原子ではなく永遠の原子である」とキェルケゴールは言ったそうです[2]。その永遠の原子の連続した数十年分をわれわれは地上で生活します。これは哲学者のいう原子であり物理学者はそのような原子を認めていませんが、今誰も考えつかない理論がやがて出てくるかもしれません。

プラトンのティマイオスの宇宙創世物語には時間の創造も述べられています。われわれの宇宙はデミウルゴスと呼ばれる創造主があるモデルを基に構築した。われわれの宇宙の存在とは別次元に永遠に「ある」不滅のモデルがあり、できるだけそれに似せて宇宙を生成した。それは「なる」ものである以上いづれ消滅することは避けられないが、そこに永遠性をできるだけ取り込も

うとした。

--

モデルそのものは、永遠なる生きものなので、万有をもできるだけそのようなものに仕上げようとした。ところで、永遠であることがその生きもの本性だったが、生み出されたものに永遠という性質を完全に付与することはできなかった。それにもかかわらず、神は、永遠を写す何か動く似像を作ろうと考えて、宇宙を秩序づけるのと同時に、一のうちに静止している永遠を写す、数に即して動く不滅のその似像を作った。この似像をわれわれは「時間」と名づけたのである。

[1]

--

静止しているものに動きを与えるのが時間の本質です。時空 4 次元宇宙の時間軸は動きを与える軸です。

時間創造のキーとなるこの 1 節『一のうちに静止している永遠を写す、数に即して動く不滅のその似像を作った』が理解しにくい。

訳注には、『宇宙は一のうちに静止している永遠の性質を完全には付与されなかったので、それはまた時間がその中において現れる多という性質をも併せ持たなければならないのである。[1]』とあり、英語版を見ると

--

he made this image eternal but moving according to number, while eternity itself rests in unity:[3]

--

とあり、この”moving according to number”は時間が持つ多を意味し、時間により多を生み出すという特性により永遠性に近づけようとしたということなのだろうか。

●絵画、音楽と文学

漱石の草枕で、主人公の画家は何か表現したいものがうちから生まれつつあるのを感じますが絵にできない。こういう時にきっと音楽で表現するのだろうと思いますが、音楽には時間軸がある点が絵画との最大の違いであり、自分は画家であり音楽家ではないので手に負えない。

絵画とは画家の心に浮かんだイメージをキャンバスに閉じ込めたものです。それは動かないが、そこにどれほどの永遠性を閉じ込められるかが画家の力です。

音楽は演奏開始から楽譜に記された未来に向かって今という一点が進行し、過去が増え、未来が減少してゆきます。終了した時にはその演奏は過去の記憶になります。音楽は作曲家により時空が閉じ込められた小宇宙です。演奏家がそれを鑑賞者の時空間に解放し、感動を伝えます。

文学にも時間軸がある。作品の中に時間の前後はあっても読者は前から読み始めます。今現在読んでいる頁と行より前は読者にとって過去の体験であり、以降はこれから体験する未来です。つまり小説も音楽のように時空が閉じ込められた小宇宙です。

俳句もある一瞬の空間を五七五に切り取り、絵画の別の表現方法と見ることもできますが、絵画よりは時間要素があります。字面を追うだけなら数秒で読めます。1 行目を読んだ時「何が始まるのだろう」と思い、2 行目に進んだ時「おやっ」と感じ、最後まで読んで作者の感動が伝わってきます。読む時間は短くても過去・現在・未来の時間があります。俳句も作者の創造した小宇宙です。

絵画は時間軸がなく、時間軸を持つ音楽や文学と比べてどうなのか。ティマイオスでは宇宙に永遠性を組み込む手段として時間を創造したが、それは完全な永遠ではない。つまり時間軸よりも永遠性の方に意味がある。芸術作品に永遠性を閉じ込められるかどうかは価値であり、時間軸があるかどうかは本質ではない。

●永遠の有

ティマイオスの時間創造の物語は続きます。時間を創造した結果、過去と未来という時間の種類 (“species of time[3]”) が生まれた。

--

宇宙が生じる前は、昼も夜も、月も年も存在しなかったのだが、神は宇宙を構築したのと同時に、それらの生成を仕組んだからである。これらすべては時の部分であり、「あった」と「あるだろう」は、時の種類として生じた。これらをわれわれは気づかずに誤って、永遠の有に適用している。

--

過去と未来は生成される「なる」ものであり、現在のみが永遠の有である。

--

つまりわれわれは、その永遠の有が「あった」「ある」「あるだろう」といっているが、「ある」だけが正しい言い方としてふさわしく、「あった」と「あるだろう」は、時間の中を進行する生成について言われるのがふさわしいのである。[1]

--

今という瞬間のみが「永遠の原子」なのです。

以下、次回...

参考書籍

- [1]プラトン、[訳]岸見一郎、ティマイオス、2015、白澤社
- [2]渡辺慧、時、2012、河出書房新社
- [3]Plato, [訳]Benjamin Jowett, Timaeus, 2012, Amazon (Kindle 版)